

『トラトラトラ』

2016年12月09日

昨日の12月8日は真珠湾攻撃によって、米国のいう「太平洋戦争」に突入した日である。真珠湾攻撃は奇襲戦法で、米海軍に多大な被害を与えた。奇襲作戦が成功したことを「トラトラトラ」という暗号で大本営に打電したという話は有名である。成功の報を、日本国民は大歓喜した。『真珠湾攻撃 総隊長の回想』と題する自叙伝を淵田美津雄氏が著している。この時のことを、下記のように書いている。「私は電信員を振り返った。『水本兵曹、甲種電波で発信、我奇襲に成功せり』、『ハイ』水本兵曹は、待ってましたとばかり、すぐに電鍵を叩いた。『トラトラトラ』の連送であった。」

淵田氏は、子どもの頃から軍人に憧れ、海軍兵学校に入り、真珠湾攻撃の時は総指揮官になっていた。「トラトラトラ」の発信時は、最高に心が燃えていただろう。その後、指揮官として幾多の作戦に関り、第一航空艦隊首席参謀の重責を担い、軍の中核で活躍している。太平洋戦争は、始めは勢いが良かったが、徐々に劣勢になり、ミッドウェー海戦を機に、敗北は避けられなくなった。沖縄県民を巻き込んだ沖縄戦、本土への空爆、そして、広島、長崎に原爆を投下された。1945年8月15日、天皇は詔勅を発し、敗戦を迎えた。アジアの諸地域に甚大な被害を与えたアジア・太平洋戦争は終わった。

淵田氏にとって、敗戦は耐え難い屈辱であった。ミズーリ号で行われた降伏調印式に立ち会い、東京裁判で証言もしている。連合軍による一方的な戦犯裁判を憎み、反撃の手立てはないものかと怒りに燃えていた。戦後の混乱、戦争責任の追及など息苦しい日々であった。淵田氏は故郷の奈良県に帰り、自分で井戸を掘り、家を建て、3反歩ばかりの水飲み百姓になった。世相は職業軍人に対する風当たりが強く、肩身の狭い生活であった。

淵田氏は捕虜になった日本兵から聞いた話で、キリスト教に回心した。日本兵が米国ユタ州の捕虜病院に収容された。マーガレット・コヴェルという20歳前後の女性が、「皆さん、何か不自由なことがあったり、何か欲しいものがあったりしたら、私におっしゃって下さい。私はなんでもかなえて上げたいと思います」と言われた。売名的な意図があるのではと思っていたが、彼女は親身になって看病をした。傷痍兵たちは心を打たれ、その理由を聞いたら、「私の両親があなたがたの日本軍隊によって殺されたからです」と答えた。両親が殺されたにもかかわらず、日本兵捕虜に親切を尽くす姿に、あり得ないと驚愕し、聞き質した。彼女の両親はバプテスト派の宣教師でフィリピンに遣わされていた。マニラが日本軍に占領された時、北ルソンの山中に隠れていたが、ゲリラ狩りで捕らえられ、スパイとして斬首された。宣教師夫妻は殺される前、篤い祈りを捧げた。その祈りは自分たちを殺す者への赦しの祈りであった。娘マーガレットは両親の祈りに倣い、憎いと思う日本人を憎しみに返すことではなく、日本兵捕虜を愛することと考え、この病院に来たと答えた。淵田氏は、これを聞いて聖書を熱心に読み始めた。ルカ福音書23章34節「かくて、イエス言いたまふ、父よ、彼らを赦し給へ、その為す処を知らざればなり」の御言葉に触れた。主イエスの十字架が敵意と憎しみを取り除いてくださったことを知ったのである。赦しによる和解、そこに平和がある。淵田氏は49歳で洗礼を受け、和解と平和を語る宣教師になった。日本はもとより、全米各地を巡り歩き、講演活動を続け、73歳で召された。

宣教師夫妻はフィリピンに行く前、関東学院の宗教主任として聖書を教え、横浜港南台教会のY・T氏は学生時代、「Y君、Y君」と言って、可愛がられたという。私の友人F・M牧師は淵田氏の甥にあたる。「トラトラトラ」の話は身近なものに感じている。